

紡いでいく—

神楽 そのとき、人は鬼になり、姫になり、神になる

神楽の「舞」には、大きく分けて神様をお招きする「神祇舞」と、お迎えした神様を楽しませる「能舞」の2つに分かれる。通常、まず神祇舞を行ってから、次に能舞へと進む。

勸善懲悪のストーリーが多い能舞は、大きく分けると「道行き」、「さぐり」、「からみ」、「立ち会い」、「嬉し舞」という順序で構成され、その役ごとに、さまざまな所作が繰り返られる。

「葛城山」で主人公の源頼光を舞うときは、貫禄のある立ち振る舞いに気を付けるなど、その役になりきって舞っています。

「演目の時代背景や、その役のことを調べるのも面白いです」。知識が広がる、その分、舞にも影響するといひ、



「葛城山」—浅原神楽団—
病にかかった主人公の源頼光(みなもとのらいこう)は、侍女に化けた土蜘蛛に毒を飲まされるが、苦しみながらも反撃。頼光は四天王を呼び寄せ、土蜘蛛を退治する。写真は、源頼光を舞う坂田さん。写真提供_酒井恵子さん(浅原)。



戦いの勝利に喜ぶダイナミックな「嬉し舞」。

他の神楽団の公演もたびたび見に行き、神楽の勉強は欠かせないとのこと。

「合戦で勝利したあとに舞う『嬉し舞』では、複数で回転しながらスピードのある舞を舞います。腕の角度や、首の残し方

足さばきなど、息がどこまで合っているかが勝負です」と坂田さん。「自分の思い通りに舞えて、拍手をもらえたときが最高の瞬間です」。子どもが少ない浅原地域では、

かぐらびと 神楽人 式

面 めん

キラリと光る匠の技



「鐘馗(しょうき)」—河津原神楽団—
四季折々いろいろな疫病をはやらせて、この国を魔の国にしようとする大暴れる疫神。上杉さん作成の面。



工業製品ではないため、一つ一つその表情は異なり、まったく同じ面は二つ存在しないという。基本的には消耗品だが、手入れや補修をすれば50年は持つという。

神楽の面は、鬼や鬼女、狐や妖怪といった患者だけでなく、姫や翁など、登場人物を分かりやすく表現している。そのため、魔界に棲む鬼は、この世のものとは思えないほどの凶暴さと不気味さを、ひょうきんな道化には、噴き出してしまうようなニークさを追求。舞方が役になりきるために、面は欠かせない。

神楽は、能や狂言と同じく、面を使う舞台芸の一つ。昔は木製のものも使われていたが、現在は「紙製」が主流。張り面であるため、木彫りの面に比べ軽く丈夫なのが特徴。同じ面でも、舞次第でその表情を変えられる面は、神楽において、なくてはならないものだ。

河津原神楽団の団員として活動してきた上杉直實さんは、独学で面作りの道を切り開いてきた。旧佐伯町職員として、当時心療の指導員をしていた昭和55年ころに、老人のボケ防止のために面作りを取り入れたのが、そのきっかけという。

その後、その知識を生かして神楽の面を作り始めるが、「当初は神楽で使うためでなく、もっぱら飾ったり、人に贈ったりするために作っていた」とのこと。現在では、所属する河津原神楽団から頼まれて作ることもあるそうだ。

面作りは、まず石膏の原型から粘土で型を取り、その粘土に和紙を張っていく。それを乾燥させてからこすり、また和紙を張り重ねる。そして、その作業を20回以上も繰り返した後、粘土を割って面を取り出す。

彩色の際の表情づくり、特に「目」が一番難しく、鬼の面であればいかに恐ろしくさせるか

が腕の見せどころだという。

「鬼の面を作るときは、気持ちも鬼になっています。鬼といっても、男の鬼と女の鬼で作るときは、気持ちが変わります」と上杉さん。商売にはしていないため、気分が乗らないときは、なかなか進まないといひ、一つの面が出来上がるまで数カ月掛かることもあるとか。

「神楽があることが河津原の誇り。神楽にも終わりが無いように、面作りも終わりが無い世界。団の要望に沿った面を作ることで、神楽を支えていきたい」と語ってくれた。

かぐらびと 神楽人 参

舞 まい

「静」と「動」を操る舞台の柱

「舞」は奏楽とともに、神楽を支える大きな柱。「約束事の世界」で、アドリブがないのが「舞」。そこには、執り行う順序や所作(動作)など、さまざまな決まりが存在する。複数での激しい合戦の場面でも、寸分の狂いなく舞う姿は、稽古に稽古を重ねた賜である。

後継者の育成が切実な問題となっている。「永い歴史のある神楽です。わたしたちの代で廃れさせる訳にはいきません。わたしたちの舞を見て、少しでも興味を持ってくれたら」と坂田さん。

「友達や知り合いから『神楽が見たいから、まつりには帰ってくるよ』と言われると、やっぱりうれしいですね。神楽をやって良かったと心から思います」と語ってくれた。

神楽は、地元への恩返し

浅原神楽団

さかた・まさや
坂田 雅也さん(24歳)

保育園のお遊戯がきっかけで興味を持ち、小学校2年生で始めた。9歳で演目「牛若丸」の主人公を舞う。そのため、高校生のころまで髪を腰まで伸ばしていたという。「神楽は生活の一部。神楽のない生活は考えられません」と、就職も地元を選び、「生まれ育った地元で神楽で恩返しをしたい」と話す。



河津原神楽団

うえずぎ・なおみ
上杉 直實さん(61歳)

昭和50年、25歳のとき仕事で神楽と関わったのが、団に入ったきっかけという上杉さん。しかし、その根底には「小さいころ、父が舞っていた神楽に憧れていたから」だという。「娯楽の少ない当時、この地域では芝居と盆おどり、そして神楽は最高の娯楽だった」と当時を振り返る。

右が石膏の原型。左の粘土の型の上に和紙を張っていく。水で張り、原型からはがしやすくする「水張り」と糊で張る「本張り」がある。

